

宮城 社会 3.11大震災

<もう一度会いたい> 喪失感 夫婦に溝生む

◎ (9) 言い争いが絶えず

仮設住宅に移って初めての年の瀬だったと思う。

今野ひとみさん(45)＝宮城県石巻市＝は夫の浩行さん(53)に1泊の温泉旅行を持ち掛けた。震災で3人の子を亡くしてからどこにも行っていない。

仮設の風呂は狭い。たまには広い湯船で脚を伸ばしたい。

「俺は行かん。位牌(いはい)と遺影はここにある。子どもたちを置いて出掛ける気にはなれん」

返事は素っ気なかった。

旅の提案は夫を思っていることでもある。毎日ふさぎ込んでいるから、気晴らしになるだろうと。

厚意を蹴飛ばされた気がした。

<離婚の話も>

「あんたのために言っただよ」

「行くなら一人で行け」

夫も言い返す。口げんかで収まらず、取っ組み合いになった。

夫とはいえ、相手は大男だ。勝ち目はない。苦し紛れで110番した。

こけ脅しのつもりだったので1回の呼び出し音で切ったが、逆探知され、パトカーが駆け付けた。

お巡りさんに事の次第を話す。たっぷり油を搾られ、お引き取り願った。

サイレン音を聞き付けた住人も集まって来た。「何でもありませんから」と罰の悪い顔で人払いする。

けんかが絶えなくなった。

普段なら聞き流せることも、気持ちがささくれ立っているせいか、いちいち気に障る。

仏壇を作る作らない。

「仏壇設けようよ。仮設で持っていないのはうちとあと1軒だけらしいよ」

「そのうち新しい家を建てんだから。そんな時立派なやつ設けるから今は簡易なので辛抱しろって」

宗教に入る入らない。

「知り合いに入会勧められたの。見込まれたら支部長にしてくれるって」

「そんなうさんくさい話に乗れっか。この間もばか高い鍋買わされそうになったろ」

毎度エスカレートし、決まって離婚話に発展する。

「役場から届もらって来て」

「ああ分かった。後悔しても遅いかんな」

夫は役場の支所に取りに行き、自分の判を押して妻に渡す。

<法外な要求>

「慰謝料6000万円。別れんならよこせ」

妻が吹っ掛けてくる。

「そんな大金あるわけねえべ」

「だったらこの話は無しだ」

妻は届をビリビリと破った。

何日かしたら別の火種でもめる。

夫はまたもらいに行く。前回と窓口が同じだと恥ずかしいから、違う支所にする。

「6000万」

妻は今度も法外な要求をする。

「だから払えねえって」 届はごみ箱行きになる。

この繰り返しだ。



子を亡くした喪失感の生む負の感情が夫婦関係を波立たせる

拡大写真

妻は実は夫と別れようとはこれっぽっちも思っていない。カッカとした勢いで別れ話を持ち出した方がいいものの、収めるに収められなくなっただけだ。無理難題を突き付けて離婚話をご破算にし、結局夫をつなぎ留めている。

そんな女心に夫は気付いていないのか、気付いていないふりをしているだけなのか。

ひとみさんはまだ浩行さんに確かめていない。

2015年12月11日金曜日